

# 英語を母語とする日本語学習者による 語末アクセントの生成

Becky Taylor

キーワード 第二言語習得、後接語、発話環境、品詞、  
アクセント型の頻度分布の習得

## 要旨

英語を母語とする日本語学習者は日本語の語アクセントをどのように習得するか。先行研究から、生成されるアクセント型は発話環境の影響を受けやすいことが分かっている。本研究では、語末アクセントに焦点を当て、学習者 10 名が生成するアクセント型を分析した。その結果として以下の 3 点を示す。①語末アクセントは容易に習得されず、標準語において語末にアクセント核を持つ語は、語頭または語中にアクセント核が置かれる傾向がある。②後接語の付加により、標準語とは異なるアクセント型のパターンが現れることがある。③生成されるアクセント型は品詞によって異なる。後接語の有無が、学習者の生成に見られるアクセント型のバリエーションの原因の一つとなっている可能性、さらに、標準語にあるアクセント型の頻度分布が習得されている可能性について論じる。

## 1. はじめに

日本語の第二言語話者は語アクセントをどのように習得するか。本研究では、英語を母語とする日本語学習者（以下、「英語話者」）に焦点を当てこのテーマを取り上げる。英語話者が生成する語アクセントの特徴を調査した研究（堀口 1973；磯村 1996；久野 1998；土岐 1980；山田 1994；吉光 1981）では、無核語の有核化、有核語の無核化、アクセント核の位置の誤りなどが報告されているが、どのような語がどのようなアクセント型で生成されるかについては、明らかになっていない。

英語話者である筆者が日本語を話す際、「鍵だ」の「か」や「遊ぶから」の「そ」から声の下がるように発音する傾向があるように思われる。この 2 つの例は日本語の標準語（東京式アクセント、以下、「標準語」）において、kaGI+da、asoBU+kara<sup>1</sup>のように、先行する語の最終拍にアクセント核がある点

が共通している。標準語では、語の最終拍にあるアクセント核（以下、「語末アクセント」）は、語がコピュラや助詞に先行している場合にのみ実現されるという特徴を持つ。単独の語の場合には実現されない。この点については以下に詳しく述べるが、学習者にとって習得が困難である要因となる可能性がある。本研究は、標準語におけるアクセント型が語末アクセントである語は、英語話者によって、どのようなアクセント型で生成されるかを明らかにすることを目的とする。

なお、標準語では、アクセント核はピッチの急な下降として実現され、アクセント型の区別はアクセント核の有無と位置のみで行われる（杉藤 1982, pp. 50-75）。本研究では、「アクセント型」とは、アクセント核の有無と位置であると定義する。Pierrehumbert & Beckman (1988) に従い、語の始めに現れるピッチの上昇に関して、語の特徴ではなく区レベルの特徴であると考え、分析の対象外とする。

以上の目的のために、イギリス英語を母語とする中級以上の日本語学習者を対象にした、以下の調査を行った。語末アクセントの環境になるように、日本語の尾高型名詞に「だ」を、平板型動詞に「から」または「ので」を付加した語を音読させ、どのアクセント型で生成されるかを調べた。さらに、単独では無核、後接語の前では語末にアクセント核を持つという特徴が習得されているかどうかを検討するために、対象の尾高型名詞と平板型動詞が語単独の環境でどのアクセント型で生成されるかを調べ、後接語の付加の影響を分析した。なお、本研究では、名詞と動詞に後続するコピュラと助詞を合わせて「後接語」と呼ぶこととする。

分析の結果として、以下の3点を示す。第一に、語末アクセントは英語話者にとって容易に習得されず、標準語において語末にアクセント核を持つ語は、語頭または語中にアクセント核が置かれる傾向があることを示す。第二に、後接語の付加により、標準語とは異なるアクセント型のパターンが現れることが多いことを報告し、後接語の有無が、学習者の生成に見られるアクセント型のバリエーションの原因の一つとなっている可能性について論じる。第三に、生成されるアクセント型は品詞によって異なることを示し、標準語にあるアクセント型の頻度分布がある程度習得されている可能性について言及する。

本研究では、標準語におけるアクセント型が語末アクセントである語に調査を限定し、結果を他のアクセント型の語とは比較していない。従って、得られた結果が語末アクセントの語に限定されるものか、あるいはより一般性を持つかは明らかでない。本論文は、後接語の付加の影響、品詞の影響からうかがえるアクセント型の頻度分布の習得の可能性という2つの結果を述べるが、こ

れらについてはこれまで、英語話者の語アクセント習得研究では管見の限り指摘されていないため、報告する価値があると思われる。

### 1. 1. 標準語における語末アクセント

標準語では、語末アクセントは「鍵」のように尾高型名詞や「遊ぶ」のような平板型動詞が特定の語に先行する際に現れる。具体的には、「の」を除く助詞やコピュラの「だ」が尾高型名詞に後続する場合（金田一・秋永 2001、付録 pp. 72-73）、助詞の「の」、「し」、「か」などが平板型動詞に後続する場合（金田一・秋永 2001、付録 pp. 74-75）に現れる。語末アクセントが現れるのはこれらの語が特定の後接語に先行している場合のみである。尾高型名詞と平板型動詞はいずれも、後続語を伴わない形では、無核で生成される。<sup>2</sup>

### 1. 2. 先行研究

本研究の調査対象はイギリス英語話者であるが、同じ英語圏についてはアメリカ英語話者（堀口 1973；磯村 1996；久野 1998；土岐 1980）及びオーストラリア英語話者（山田 1994；吉光 1981）を対象に語アクセントの特徴を調査した研究がある。それらの研究では、学習者の母語がアメリカ英語か、あるいはオーストラリア英語かにより異なる特徴は指摘されていないため、ここではまとめて紹介することとする。

英語話者がどのような語をどのアクセント型で生成するかについて、報告されていることは以下の通りである。無核のアクセント型が現れにくく、有核になる傾向があるとされている（土岐 1980、p. 96）。一方で、最も多用されるアクセント型が無核であるという学習者もいる（久野 1998）。その他に久野（1998、p. 85）は、個人的な傾向として最終拍から 2 拍目にアクセント核を置く傾向を持つ学習者、最終拍から 3 拍目に置く傾向を持つ学習者がいることを示している。

英語話者が生成する語アクセントの特徴を調べた研究では、ストレス付与規則の影響が指摘されている。例えば、堀口（1973）は英語のストレス付与規則を日本語の 4 拍名詞に当てはめ、英語話者が日本語の語に付与するストレスを予測している。その予測を要約して述べれば、ストレスは原則として語末から 2 拍目に置かれるが、特殊拍や母音連続がある場合は 1 音節を成し、そこにストレスが置かれることもあるということになる。

土岐（1980、p. 96）は、堀口（1973）が扱った 4 拍語以外の語においても、語末から 2 拍目にアクセント核が置かれるのは英語のストレス付与規則の影響によるものと解釈している。しかしながら、堀口（1973）によると、実際

に生成された発話には、予測通りの場合も予測とは異なった場合もある。

英語話者の生成では、語がどのアクセント型で生成されるかにはバリエーションが見られる。同じ学習者が同じ語を生成しても、場合によって異なるアクセント型で生成することがある(山田 1994, p. 18)。土岐 (1980, p. 87) は英語話者のアクセント生成について、アクセント型は環境に左右されやすいと述べている。しかしながら、どのような環境であればどのようなアクセント型になるかを検討している研究は少ない。例外は磯村 (1996) であるが、英語を含む様々な言語を母語とする日本語学習者には、平叙文の「○○です」という形を「高低です」で、疑問文の「○○?」という形を「低高?」で生成する傾向があるとしている。

以上の先行研究では、英語話者が生成するアクセント型としては無核、あるいは語末から 2 拍目以上離れた位置にアクセント核が置かれたものが最も多く報告されているようである。従って、語末アクセントは習得されにくいと推測できるかもしれない。しかしながら、語末アクセントが学習者によってどのように生成されているのか、その実態の調査を目的としている先行研究は見当たらない。研究目的の一部として、吉光 (1981, pp. 67-69) 及び山田 (1994, pp. 115-117) は英語話者を対象に、「名詞+助詞」、「平板型要素+の・ん・し」を含む多数のアクセント付与規則の習得度を調査しているが、データが限られている。

## 2. 調査方法

### 2. 1. 資料語

資料語は表 1 に示す 2~3 拍の尾高型名詞及び平板型動詞それぞれ 10 語である。

表 1 資料語

2 拍の尾高型名詞	3 拍の尾高型名詞
鍵、町、音、足、色、山、次、冬、夏、駄目	男、娘、表、言葉、休み、曇り、流行、話、流れ、眺め
2 拍の平板型動詞	3 拍の平板型動詞
する、やる、売る、寝る、乗る、行く、置く、泣く、押す、開く	遊ぶ、登る、送る、変わる、座る、止める、渡す、減らす、探す、磨く

重音節がアクセント付与に与える影響を避けるために、軽音節のみで構成さ

れる語を対象とし、特殊拍（撥音、促音、長音）及び母音連続を含む語は扱わないこととする。母音が無声化している場合についても、無声母音を含む拍とその前の拍が英語話者にとって重音節に感じられる可能性があると考えられる。そのため、無声環境（無声子音の間）の狭母音を含む語を除外している。さらに、以下の四つの要因を考慮して資料語を選定した。第一に、母語からの影響を考え外来語を除外した。第二に、標準語のアクセント型に揺れない語（『新明解日本語アクセント辞典』（金田一・秋永、2001）に記載のアクセント型が一つのみの語）を用いた。第三に、調査を名古屋で行ったため、できるだけ名古屋方言のアクセント型が標準語のアクセント型と同じである語を使用した。第四に、中級以上の日本語学習者にとって馴染みのある語であるよう、初級教科書の『みんなの日本語 I・II 本冊』（スリーエーネットワーク編、1998）または、アクセント型別に語彙が記載されている『Japanese Pronunciation Guide for English Speakers』（Fujito et al. 1979）のいずれかに載っている語から選定を行った。

原則として標準語のアクセント型が一つしかない語を用いているが、尾高型名詞に関しては、避けられないアクセント型の変種が二つある。一つ目は、平板型に変化させる接頭辞の「お」（例：「おやすみ」）である（金田一・秋永 2001、付録 p. 94）。二つ目は、「休み、話」などについて、連用形のアクセント型が名詞と異なる点である。例えば、「そこに休みに行こう」では、アクセント核は名詞の「休み」と違って語末ではなく語末から 2 拍目に来る（金田一・秋永 2001、付録 p. 52、pp. 74-77）。但し、これらに関しては、尾高型名詞の特徴の一つであると考え、資料語の選定の問題ではないと判断した。さらに、3 拍の尾高型名詞に関してのみ、選定条件を満たす語が 10 語に満たなかったため、上述の二つの教科書に載っていない 2 語（「流れ」、「流行」）を対象語とした。

資料語に付加させる後接語は以下の通りである。尾高型名詞には、コンピュータの「だ」を（例：「鍵だ、男だ」）、平板型動詞には助詞の「から」を付加する（例：「するから、遊ぶから」）。但し、動詞の最終拍が「す」や「く」の場合は、無声化が起こらないように、「から」の代わりに「ので」を用いる（例：「行くので、渡すので」）。<sup>3</sup>以下では各資料語の種類 10 語を代表して単独の資料語を「鍵」系、「する」系などと呼び、後接語を付加させた資料語を「鍵だ」系、「するから」系などと呼ぶ。

資料語に付加させる後接語を名詞と動詞で異なる拍数のものに行っている背景には、次の二つの理由がある。第一には、付加する後接語を 1 拍語に揃えるために動詞の録音資料を「行くか、行くの」のようにすると、中立でないイン

トネーションで生成される可能性があるためである。例えば「行くか」は疑問や驚き、「行くの」は疑問や強調を示すようなイントネーションになる可能性がある。磯村（1996）の報告から、英語話者の日本語において、語のピッチパターンがイントネーションに影響されることが知られているため、このような資料は避けなければならない。第二には、付加する後接語を 2 拍語に揃えるために名詞の録音資料を「鍵から、鍵より、鍵さえ」などにすると、その独立性が低く、文脈がない場合には意味が想像しにくいと考えられるためである。

語末アクセントが現れる環境は標準語では、名詞と動詞に後続する後接語の拍数が異なることがしばしばある。例えば名詞に後続する「だ、は、が、を、も」などに対して動詞には「のだ、のは、のが、のを、のも」が後続し、動詞に後続する「から、ので、のに」に対して、名詞には「だから、なので、なのに」が後続する。それによってアクセントが影響を受けることはないので、後接語の選定を行う際に拍数を無理に揃えることはしない。

## 2. 2. 調査参加者

調査参加者はイギリス英語を母語とする愛知県在住の日本語学習者 10 名である。<sup>4</sup>なお、イギリス英語話者に限定することの目的は、英語を一種類に揃えるためであり、特にイギリス英語独自の特徴を調べる目的で限定しているわけではない。

資料語が既習である可能性を高めるために、中級以上の学習者に限定している。背景調査を生成調査の前に行っているが、それによると、調査参加者 S1～S3 は調査当時中級レベルの日本語のクラスを受講しており、S4～S10 は日本語環境で就業または就学中であり日本語は上級以上であると述べている。

表 2 は調査参加者の年齢、日本語学習歴、在日期间などを示している。

表 2 調査参加者

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
性別	男	男	女	女	男	男	男	男	女	女
年齢	34	31	21	26	34	66	45	27	40	28
母国での学習歴	3年	なし	2年	なし	なし	なし	なし	なし	なし	3年
日本での学習歴	1年	7月	1週	2年	4年	4年	4月	6月	2年	1年
在日期间	1年	6年	1週	5年	7年	27年	18年	4年	17年	7年

### 2. 3. 録音方法

本研究の資料語計 80 語はより規模の大きい調査で用いた資料語（計 180 語）の一部である。調査は 2007 年に名古屋大学文系総合館の録音室で行った。資料語は振り仮名（平仮名）付きの漢字で調査参加者に提示し、それぞれ 3 回ずつランダムに生成させたものをデジタル録音（44.1 kHz、16 bit）した。連続した読み上げによって生じるイントネーションを避けるために、各資料語を一枚ずつ紙で提示した。「私は～と言いました」のようなキャリア文は用いなかったが、その理由はアクセント句の作り方やキャリア文自体のアクセント型が学習者間で異なり、そのことが資料語のアクセント型に影響を与えることを避けるためである。

### 2. 4. 生成されたアクセント型の判定方法

生成された発話のアクセント型は、音声学の専門知識を持つ日本語母語話者 3 名に判定させた。判定させたのは、原則として生成された 3 回目の発話のみであるが、3 回目の発話が雑音などで使えない場合は 2 回目の発話を代わりに用いた。判定者には調査参加者の発話をランダムに聞かせ、アクセント核がないものには回答欄の「平」に丸、アクセント核があるものには、その位置を記入させた。分析の際、3 名の判定が一致しなかった場合は一致している 2 名の判定を用いた。判定が 3 名とも異なったものは分析から除外した。

判定者 2 名以上の判定が一致した割合は 99.5%と高く、判定が一致しないために除外した発話は「鍵だ」系、「男だ」系それぞれ 1 語ずつ、「男」系 2 語、合計 4 語のみであった。以下、アクセント型の割合を 2 名以上の判定が一致した語の数を 100%として計算している。すなわち「鍵だ」系、「男だ」系は 99 語中、「男」系は 98 語中、その他の資料語は 100 語中の割合である。

## 3. 結果と考察

### 3. 1. 語末アクセント

本節では、英語話者は語末アクセントを容易に習得できず、語末より前にアクセント核を置く傾向があることを示す。

表 3 は各種類の資料語が後接語に先行している形で生成されたときの、アクセント型の数とその割合を示している。アクセント核の位置は黒丸で表記する。標準語のアクセント型は語末にアクセント核があるため、「鍵だ」系と「するから」系は 2 拍目に、「男だ」系と「遊ぶから」系は 3 拍目にアクセント核があることとなる。

表3 後接語を付加した資料語が生成されたアクセント型

資料語 (標準語のアクセント型)	生成されたアクセント型 (数/%)
「鍵だ」系 (○●+○)	●○+○ (54/54.5) ○●+○ (28/28.3) ○○+○ (17/17.2) 合計 (99/100)
「するから」系 (○●+○○)	●○+○○ (63/63.0) ○●+○○ (26/26.0) ○○+●○ (0/0.0) ○○+○○ (11/11.0) 合計 (100/100)
「男だ」系 (○○●+○)	●○○+○ (14/14.1) ○●○+○ (37/37.4) ○○●+○ (30/30.3) ○○○+○ (18/18.2) 合計 (99/100)
「遊ぶから」系 (○○●+○○)	●○○+○○ (0/0.0) ○●○+○○ (59/59.0) ○○●+○○ (27/27.0) ○○○+●○ (0/0.0) ○○○+○○ (14/14.0) 合計 (100/100)

表3から、語末にアクセント核が置かれる割合はどの種類の資料語でも、約30%であることが分かる。

「鍵だ」系、「するから」系、「遊ぶから」系は似通った傾向を示している。後接語の拍数が2拍の場合でも、suru+KAra、asobu+KAraのように後接語にアクセント核が置かれた発話もなく、資料語が3拍の「遊ぶから」系でも、語末から3拍目(つまり「遊ぶ」の1拍目)にアクセント核が置かれた発話もない。これらの資料語に関しては、後ろから2拍目のアクセント核の割合は60%前後と高くなっている。カイ二乗分布を使った適合度検定を行ったところ、最終拍から2拍目のアクセント核は、語末アクセントに比べ、5%水準で有意に多く現れていることが分かる(「鍵だ」系、 $\chi^2(1)=8.24$ 、 $p<.05$ ; 「するから」系、 $\chi^2(1)=15.38$ 、 $p<.01$ ; 「遊ぶから」系、 $\chi^2(1)=11.91$ 、 $p<.01$ )。



一方「男だ」系に関しては、語末から2拍目のアクセント核は語末アクセントより多少多く生成されているが、有意な差ではない ( $\chi^2(1)=0.73, ns$ )。さらに資料語の拍数が同じである「遊ぶから」系と違って、語末から3拍目(つまり「男」の1拍目)にアクセント核が置かれた発話も現れている。

これらの結果から2点に分かる。まず、語末アクセントは英語話者によって容易に習得されない。本研究の資料語は中級以上の学習者にとって馴染みがあると予測されるものである。しかしながら、語末アクセントが現れたのは3割程度にとどまった。次節では、単独、後接語の前の2つの発話環境において標準語通りのアクセント型で生成された資料語は、さらに少ないことを示す。語末アクセントの習得は英語話者にとって不可能ではないが、容易ではないことが明らかとなった。

これらの結果から分かる2点目は、語末より前にアクセント核が置かれる傾向があることである。後接語に先行する2拍の尾高型名詞(「鍵だ」系)、2~3拍の平板型動詞(「するから」系、「遊ぶから」系)では、語末アクセントに比べ、語末から2拍目のアクセント核が有意に多く生成されている。つまりこれらの資料語に関しては、アクセント核は語末にではなく、その前の拍に置かれ、2拍の尾高型名詞は「傘だ」などの頭高型名詞のように、平板型動詞は「見るから」や「食べるから」の起伏動詞のように生成される傾向がある。

後接語に先行する3拍の尾高型名詞(「男だ」系)に関しては、語末アクセントとその前の拍のアクセント核は同程度現れている。このように後ろから2拍目にアクセント核が置かれる傾向は他の資料語の種類ほど強くないが、他の資料語の種類と違って語末から3拍目(つまり資料語の1拍目)にアクセント核が置かれている発話もある。従って後接語の前という環境の全体の傾向としては、語末にではなく、語のより前の拍に置かれる傾向があると言える。この傾向については、英語のストレスの影響を含め、生成メカニズムを検討する必要があるが、本研究の結果だけでは、語末アクセントの語に限られるか、より一般性があるかが分からないため、今後の課題とする。

### 3. 2. 後接語の付加

本研究の対象語は語末アクセントを持つ語であるため、単独では無核、後接語の前では有核というように、標準語においてアクセント核が現れるかどうかは後接語の有無による。本節では、この特徴が習得されているかどうかを検討するために、対象の尾高型名詞と平板型動詞が語単独の環境でどのように生成されるかを調べ、前節で述べた後接語を付加した場合の結果と比較する。

結果の分析により、次のような傾向を検証する。第一に標準語と同様の傾向

として、後接語の付加により無核の割合が低くなる傾向、第二に標準語とは異なる傾向として、2拍名詞では1拍目のアクセント核の割合が後接語の付加により高くなる傾向である。その他にも、単独と後接語の前という2つの発話環境において各語が生成される場合のアクセント型には、標準語とは異なるパターンが多く観察される。このことから、後接語の有無が、学習者の生成に見られるアクセント型のバリエーションの原因の一つとなっている可能性についても論じる。

表4は各種類の資料語が単独の環境で生成されたときのアクセント型の数とその割合を示している。表4に示している資料語は標準語のアクセント型が無核であるが、無核で生成されている割合は、資料語の種類によって42.0%～61.0%である。

表4 単独の資料語が生成されたアクセント型

資料語	生成されたアクセント型 (数/%)
「鍵」系 (○●※)	●○ (39/39.0) ○○ (61/61.0) 合計 (100/100)
「する」系 (○○)	●○ (57/57.0) ○○ (43/43.0) 合計 (100/100)
「男」系 (○○●※)	●○○ (12/12.2) ○●○ (28/28.6) ○○○ (58/59.2) 合計 (98/100)
「遊ぶ」系 (○○○)	●○○ (4/4.0) ○●○ (54/54.0) ○○○ (42/42.0) 合計 (100/100)

※語のみの発話であるため語末のアクセント核は実現されない

「鍵」系と「男」系では、最も多く生成されているのはそれらの語が標準語に持つアクセント型である無核である。「鍵」系では、無核は1拍目のアクセント核に比べ有意に多く生成されている ( $\chi^2(1) = 4.84, p < .05$ )。「男」系では、無核の次に、語末から2拍目のアクセント核が多いが、その割合には有意な

差がある ( $\chi^2(1)=10.46, p<.01$ )。

一方「する」系と「遊ぶ」系では、無核は語末から 2 拍目のアクセント核と同程度現れている。具体的には、「する」系では、無核に比べ、1 拍目のアクセント核（語末から 2 拍目）は多少多く生成されているが、有意な差ではない ( $\chi^2(1)=1.96, ns$ )。また、「遊ぶ」系では、無核に比べ、2 拍目のアクセント核（語末から 2 拍目）は多少多く生成されているが、有意差はない ( $\chi^2(1)=1.50, ns$ )。

これらの結果から、名詞は動詞に比べ無核で生成されやすいという品詞による傾向がうかがえる。これについての検討は次節にゆずる。ここでは、単独の語の結果と、前節で述べた後接語を付加した資料語の結果を比較する。

まず、単独（表 4）と後接語の前（表 3）で生成されているアクセント型における無核の割合を比較する。用いるのは、カイ二乗分布を使った独立性の検定である。検定の結果、どの資料語の種類も、後接語の付加により無核の割合が低くなっていることが分かる（「鍵→鍵だ」：61.0%→17.2%、 $\chi^2(1)=38.28, p<.01$ ；「する→するから」：43.0%→11.0%、 $\chi^2(1)=24.39, p<.01$ ；「男→男だ」：59.2%→18.2%、 $\chi^2(1)=33.23, p<.01$ ；「遊ぶ→遊ぶから」：42.0%→14.0%、 $\chi^2(1)=18.08, p<.01$ )。

前節では、後接語の前では語末より前にアクセント核が置かれる傾向があることを報告した。ここでは、単独（表 4）と後接語の前（表 3）の比較を通し、語末より前のアクセント核（つまり語末から 2 拍目、語末から 3 拍目）の割合が後接語の付加により変化したかどうかを分析する。その結果、「鍵→鍵だ」に関しては、1 拍目（語末から 2 拍目）のアクセント核の割合は後接語の後続により有意に多くなっていることが分かる（39.0%→54.5%、 $\chi^2(1)=4.23, p<.05$ )。最も多いアクセント型でいうと、kagi→KAgi+da の傾向があるが、単独では無核、後接語の前では 1 拍目（語末から 2 拍目）にアクセント核のあるアクセント型は標準語にないパターンである。一方その他の資料語では、割合の多少上がっているアクセント型があるものの、有意な差異を示しているものはない。

以上の分析では、資料語全体に焦点を当てているが、以下では、後接語の付加の影響をより深く検討するために、個々の資料語が、後接語の付加によりどのように生成されたかを分析する。その結果、単独と後接語の前という 2 つの発話環境において各語が生成される場合のアクセント型には、標準語とは異なるパターンが現れていることを示す。

表 5 は、各学習者が生成した単独の資料語のアクセント型が、後接語の付加によりどのように変化したか（もしくは変化していないのか）を示している。

各資料語の種類について発話数の多い順に並べている。アクセント型は、アクセント核の位置を語頭から数えて 1、2、3 と示し、アクセント核が生成されなかった場合は 0 と表記する。標準語通りのアクセント型は、「鍵→鍵だ」及び「する→するから」は 0→2、「男→男だ」及び「遊ぶ→遊ぶから」は 0→3 である。<sup>5</sup>

表 5 各資料語に後接語を付加したときのアクセント型の変化 (数/%)

鍵→鍵だ	する→するから	男→男だ	遊ぶ→遊ぶから
1→1 (29 / 29.3)	1→1 (46 / 46.0)	0→2 (21 / 21.6)	2→2 (30 / 30.0)
0→1 (25 / 25.3)	0→1 (17 / 17.0)	0→0 (17 / 17.5)	0→2 (26 / 26.0)
0→2 (22 / 22.2)	0→2 (16 / 16.0)	0→3 (17 / 17.5)	2→3 (22 / 22.0)
0→0 (13 / 13.1)	0→0 (10 / 10.0)	2→2 (14 / 14.4)	0→0 (12 / 12.0)
1→2 (6 / 6.1)	1→2 (10 / 10.0)	2→3 (11 / 11.3)	0→3 (4 / 4.0)
1→0 (4 / 4.0)	1→0 (1 / 1.0)	1→1 (9 / 9.3)	2→0 (2 / 2.0)
合計 (99 / 100.0)	合計 (100 / 100.0)	0→1 (3 / 3.1)	1→3 (1 / 1.0)
		1→2 (2 / 2.1)	合計 (100 / 100)
		1→3 (1 / 1.0)	
		2→0 (1 / 1.0)	
		1→0 (1 / 1.0)	
		合計 (97 / 100.0)	

表 5 から、標準語通りに生成された発話の割合は資料語の種類によって 4.0%~22.2%であることが分かる。3 節では語末アクセントが現れているのは資料語の 3 割程度と低いことが分かったが、本節では、単独・後接語の前の両方の発話環境において標準語通りのアクセント型で生成された資料語は、さらに低いことが明らかになった。

その他の傾向は以下の通りである。「鍵→鍵だ」と「する→するから」は傾向が似通っているので先に述べるが、単独でも後接語の前でも語末から 2 拍目のアクセント核 (KAgi→KAgi+da、SUru→SUru+kara) が最も多く生成されている。その次に多いのは、単独では無核、後接語の前では語末から 2 拍目にアクセント核が置かれているパターン (kagi→KAgi+da、suru→SUru+kara)、並びに標準語通りのアクセント型のパターン (kagi→kaGI+da、suru→suRU+kara) である。

「遊ぶ→遊ぶから」は「鍵→鍵だ」、「する→するから」と同様に、単独でも後接語の前でも語末から 2 拍目のアクセント核 (aSObu→aSObu+kara) が最も

多く、単独では無核、後接語の前では語末から 2 拍目にアクセント核が置かれているパターン (asobu→aSOBU+kara) が 2 番目に多いが、その次には、単独では語末から 2 拍目、後接語の前では、語末から 3 拍目 (aSOBU→asoBU+kara) が現れている。

最後に「男→男だ」は他の資料語の種類と比べ多少異なる傾向を示しているが、単独では無核、後接語の前では語末から 2 拍目にアクセント核が置かれているパターン (otoko→oTOko+da)、単独でも後接語の前でも無核で生成されるパターン (otoko→otoko+da)、標準語通りのアクセント型のパターン (otoko→otoKO+da) が多く生成されている。

以上の結果をまとめると、以下のことが言える。調査参加者の生成には、標準語の他のアクセント型 (頭高型、中高型、平板型) のように生成されている資料語がある。例えば KAgI→KAgI+da は「傘→傘だ」などの頭高型名詞、SUru→SUru+kara は「見る→見るから」などの頭高型動詞、aSOBU→aSOBU+kara は「食べる→食べるから」などの中高型動詞、otoko→otoko+da は「子供→子供だ」などの平板型名詞のように生成されるものである。一方標準語にないアクセント型のパターンも現れている。その中で最も多く生成されているのは、単独では無核、後接語の前では語末から 2 拍目にアクセント核があるパターンである (kagi→KAgI+da、suru→SUru+kara、asobu→aSOBU+kara、otoko→oTOko+da)。その他にも、aSOBU→asoBU+kara のように単独では語末から 2 拍目、後接語の前では語末から 3 拍目にアクセント核があるパターンなどがある。

以上のように、後接語の付加によるアクセント型の変化は複雑である。全ての種類の資料語には、後接語の付加により無核の割合が低くなる結果を示したが、個々の資料語を見れば、標準語通り生成された資料語は少ない。2 拍の尾高型名詞のみ、後接語の付加により 1 拍目の割合が有意に多くなるが、全種類の資料語には、標準語にないアクセント型のパターンが見られる。

先行研究では、英語話者の生成において、語のアクセント型にはバリエーションが見られることが報告されている。本研究では、後接語を付加することにより、アクセント型が標準語にないパターンを示すことが明らかになった。この結果から、後接語の有無が、学習者の生成に見られるアクセント型のバリエーションの原因の一つとなっている可能性が考えられる。しかしながら本研究では語末アクセントの語に限定しているため、語末アクセントの誤った実現であるか、あるいは、標準語のアクセント型を問わず起こりうる後接語の付加の影響であるかについては、明らかでない。

### 3. 3. 品詞

#### (1) 単独の資料語における無核の割合

前節では、「鍵」系、「男」系は無核で最も多く生成されるという結果を報告した。一方、「する」系、「遊ぶ」系に関しては、無核の割合と語末から 2 拍目のアクセント核の割合が同程度である。この結果から、名詞は動詞に比べ無核で生成されやすいという品詞による傾向がうかがえる。本節では、この傾向が統計的に有意であるかどうかを検討し、英語のストレスパターンからの転移に原因がある可能性について論ずる。

これを示すために、単独で生成されるアクセント型（つまり表 4 のデータ）を対象に、名詞と動詞における無核の割合を比較する。用いるのはカイ二乗分布を使った独立性の検定である。2 拍語では、名詞（「鍵」系）における無核の割合は 61.0%、動詞（「する」系）における無核の割合は 43.0%であるが、その差は有意である（ $\chi^2(1)=5.79$ ,  $p<.05$ ）。3 拍語では、名詞（「男」系）における無核の割合は 58.0%、動詞（「遊ぶ」系）における無核の割合は 42.0%であるが、その差は有意である（ $\chi^2(1)=5.18$ ,  $p<.05$ ）。つまり、単独の語では、名詞は動詞に比べ、無核で生成される割合が有意に高い結果となっている。

この結果と類似している傾向は本研究以前の研究においても観察されている。助川（1999, pp. 17-18）によると、2 名のポルトガル語話者のうち、1 名が名詞を無核、動詞を有核に生成する傾向がある。この傾向はポルトガル語のストレス付与規則では説明のつかない中間言語的規則であると述べられている。

英語のストレス付与には、2 音節名詞は 1 音節目に、2 音節動詞は 2 音節目にストレスが置かれやすい傾向がある（Kelly & Bock 1988, p. 390）。より音節数の多い語でも、名詞は動詞より前にストレスが置かれる傾向がある（Kelly & Bock 1988, p. 390）。そのため、本研究のこの結果に関しても、名詞は無核、動詞は有核という傾向が母語のストレスパターンから直接転移している可能性は低いと思われるが、原因は明らかでない。

#### (2) 3 拍語における 1 拍目のアクセント核の割合

本節では、3 拍語における 1 拍目のアクセント核の割合は品詞によって異なることを示し、標準語にあるアクセント型の頻度分布がある程度習得されている可能性について言及する。

3 拍語が後接語に先行する場合、1 拍目にアクセント核が置かれた発話は「男だ」系にはあるが「遊ぶから」系にはないという結果が表 3 ですすでに観察されている。単独の語に関しては、1 拍目にアクセント核が置かれた発話は「男」系は 12 語、「遊ぶ」系は 4 語であることが表 4 から分かる。

表6は、1拍目にアクセント核が置かれた回数（つまり1拍目にアクセント核をおいて生成した調査参加者の数）を資料語ごとに示している。動詞は1拍目にアクセント核が置かれにくい傾向があることが分かる。一方名詞に関しては、1拍目に比較的置かれやすい資料語（「娘、言葉」）、多少置かれやすい資料語（「男」）、置かれにくい資料語（「表、休み、曇り、流行、話、流れ、眺め」）がある。

表6 資料語ごとに1拍目にアクセント核が置かれている発話数

6	名詞：娘だ
5	名詞：言葉だ
4	名詞：娘、言葉
2	名詞：男、男だ
1	名詞：流れ、眺め、流行だ 動詞：変わる、座る、渡す、減らす
0	名詞：表、表だ、休み、休みだ、曇り、曇りだ、流行、話、話だ、流れだ、眺めだ 動詞：遊ぶ、遊ぶから、登る、登るから、送る、送るから、止める、止めるから、探す、探すから、磨く、磨くから、変わるから、座るから、渡すから、減らすから

日本語の標準語には、「めがね」のような頭高型名詞も、「あなた」のような中高型名詞もある（金田一・秋永 2001、付録 p. 10）。一方、3拍の起伏式動詞は原則として「食べる」のように最終拍から2拍目にアクセント核が置かれ、1拍目にアクセント核があるのは「通る」のように長音や「入る」のように母音連続を含む場合しかない（金田一・秋永 2001、付録 pp. 49-52）。そのため、動詞に1拍目のアクセント核が置かれにくい結果は、標準語にあるアクセント型の頻度分布を反映していると考えられる。

第二言語学習者は目標言語にある頻度分布についての知識を習得できることが知られている。例えば英語のストレス付与には、2音節名詞は1音節目に、2音節動詞は2音節目にストレスが置かれやすい傾向があるが、Davis & Kelly (1997) には、英語の第二言語学習者はその傾向についての知識を習得できるという結果があり、Wayland et al. (2006) は英語の第二言語学習者の無意味語のストレス付与にはその傾向が現れるとしている。本研究の結果から、英語話者は標準語にあるアクセント型の頻度分布をある程度習得していることが示唆される。

名詞による 1 拍目のアクセント核の置かれやすさという点では、1 拍目にアクセント核が比較的置かれやすい名詞は「娘、言葉」の 2 語、置かれにくい名詞は「休み、曇り、話」などであることが分かった。その結果から、1 拍目にアクセント核が比較的置かれやすいのは名詞全体ではなく、その名詞が単純名詞であるか、あるいは動詞からの転成名詞であるかにもよるとい傾向がうかがえる。その例外は 1 拍目にアクセント核が置かれにくい単純名詞の「表」であるが、少なくとも動詞からの転成名詞は動詞と同様に 1 拍目にアクセント核が置かれにくい傾向が示唆される。

動詞からの転成名詞に関しては、標準語では原則として平板型または尾高型で、頭高型は例外として現れるだけである（金田一・秋永 2001、付録 p. 12）。従って、1 拍目にアクセント核が置かれないのは標準語にあるアクセント型の頻度分布を反映していると言えるが、2 拍目にアクセント核が現れている点は標準語とは異なっている。今後、標準語にあるアクセント型の頻度分布から、何が習得され何が習得されないのかを調べる必要がある。

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、英語を母語とする日本語学習者が生成する日本語の語アクセントについて、以下の 3 点を示した。①語末アクセントは容易に習得されず、標準語において語末にアクセント核を持つ語は、語頭または語中にアクセント核が置かれる傾向がある。②後接語の付加により、標準語とは異なるアクセント型のパターンが現れることがある。③生成されるアクセント型は品詞によって異なる。また、後接語の有無が、学習者の生成に見られるアクセント型のバリエーションの原因の一つとなっている可能性、さらに、標準語にあるアクセント型の頻度分布がある程度習得されている可能性について論じた。

本研究では、標準語におけるアクセント型が語末アクセントである語に調査を限定し、得られた結果を他のアクセント型の語と比較していない。そのため、以上の結論について、語末アクセントの語に限られるか、あるいは、より一般性があるかは明らかでない。標準語において語末にアクセント核がある語以外にも視野を広げ調べる必要があるが、それは今後の課題としたい。

#### 注

- 1 アクセント核のある拍は大文字で、語境界は「+」で示す。以下同様。



- 2 東京方言話者の中には、後続語がない形でも尾高型名詞と平板型名詞を区別する者もいるが、ピッチの下降がない点ではいずれも無核である（杉藤 1982、pp. 182-201 ; Vance 1995）。
- 3 後から振り返ってみれば、動詞に付加させる後接語を「ので」に揃えるという方法もあったが、結果を見る限り「から」または「ので」のどちらが付加されているかによって異なる傾向はなかった。
- 4 調査参加者 S9 はドイツ生まれであるが、英語環境で育った。数人の調査参加者は愛知県以外にも日本の他の地域に住んだ経験があるため、標準語や名古屋方言以外の方言にも接している可能性がある。
- 5 2.4 節で述べたように、判定が一致せず分析から除外した発話が 4 つある。「男」で 2 語、「男だ」では 1 語であったので、表 5 では「男→男だ」のアクセント型の変化では 97 語が合計の資料語数となっている。

### 参考文献

- Davis, S. M. & Kelly, M. H. (1997). Knowledge of the English noun-verb stress difference by native and non-native speakers. *Journal of Memory and Language*, 36, 445-460.
- Fujito, Y., Nakano, E. & Seton, C. (1979). Japanese pronunciation guide for English speakers. Tokyo: Bonjin-sha.
- 堀口純子 (1973) 「英語国民による日本語の四音節名詞のアクセント核の予測とその実際」『日本語教育』19号、97-112.
- 磯村一弘 (1996) 「アクセント型の意識化が外国人日本語学習者の韻律に与える影響」『日本語国際センター紀要』6号、1-18.
- Kelly, M. H. & Bock, J. K. (1988). Stress in time. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 14 (3), 389-403.
- 金田一春彦 (監修) ・秋永一枝 (編) (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂.
- 久野志保 (1998) 「米英語話者における日本語アクセントの生成」『音韻研究』1号、83-90.
- Pierrehumbert, J. B. & Beckman, M. E. (1988). Japanese tone structure. Cambridge: The MIT Press.
- 杉藤美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』東京：三省堂.
- 助川泰彦 (1999) 「ブラジル人日本語学習者の 2 モーラと 3 モーラ語のピッチ実現」『音声研究』3 (3)、13-25.

- スリーエーネットワーク編 (1998) 『みんなの日本語初級 I・II 本冊』 東京.
- 土岐哲 (1980) 「英語を母語とする学習者におけるアクセントの傾向」 『アメリカ、カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』 3号、78-96.
- Vance, T. J. (1995). Final accent vs. no accent: utterance-final neutralization in Tokyo Japanese. *Journal of Phonetics*, 23, 487-499.
- Wayland, R., Guion, S. G., Landfair, D. & Li, B. (2006). Native Thai speakers' acquisition of English word stress patterns. *Journal of Psycholinguistic Research*, 35, 285-304.
- 山田伸子 (1994) 「日本語アクセント習得の一段階—外国人学習者の場合—」 『日本語教育』 83号、108-120.
- 吉光邦子 (1981) 「外国人学習者のアクセント核」 『日本語教育』 45号、63-75.